雪乃出羽路

一

412
一
11

雪乃出羽路

三、七、十三

二

從上手冊

四

不足分

秋田縣立

610.8 橫
442
11.

登 6509
録 442
番 11

一巻

雪の出羽路（第一より十四まで）

戒谷南山（亀吉）氏寫

横手市（金沢の人）

大正年間に寫したもの

原本は秋田市那波氏に在る

秋田県立図書館横手分館
登録番号 6509 442 11

平鹿ノ郡

比良迦を舊蝦夷遺語の比琉迦を訛りて傳ふるなり秋田ノ郡井川莊ハ畫鹿野（絲香野とも作り）といふなりそをも比琉迦を良といふる夷等が方言なるべし陸奥國津軽五郡の中なる平鹿なりその津軽の五郡といふを宇麻郡田舍郡入馬郡花輪郡平鹿郡（平賀とも作り）と津軽をいふ

一への郡と今をさなる五郡といふるを莊なるものやうなぞおもはれるる倭名抄に云り國府在平鹿郡比良を見えるるるるるる考ふる平鹿を平髭にて往古此處ハ陶など造り貢らるる地なるて志ら其名ハ貢もの名書紀神武ノ巻ハ平髭此云昆羅介と見えるる神道名

大正拾五年十月拾八日

目抄ふ平賀神事 摂津住吉の社 毎年二月祈年祭新嘗祭両度此神事なり春は二月朔日冬は十月初子の日住吉の神官和州の香山の土を取り来て平瓮を造り祈年新嘗に大神を祭る南の神館なる所なて此事なり俗ゆ土餅の祭といふ神功皇后田裳見宿禰ふ勅りして其事をなさしめ給ふ例といへり田裳見の宿禰は津守の神主の祖なりまく同書ゆ按ゆ平賀は今云かはらけこ其形平ゆゑ平賀といふ手抉とは土をくぼり制するの謂なり云々是等の土器を以て神を祭る事は神武の御宇に始れり山城の藤森の社ゆ由意ありてその社家世傳は相承は今深草の里の

土器是其縁なる云々と見えまく侯訓栞ゆ云ふ日本紀ゆ平瓮をよめりは筒の義成べし式ゆ或は水瓮を訓せり又手湯瓮は新撰字鏡ゆ毗をよめと考得ぞ鍑もよめり和名抄ゆ盆をよめり瓮に同じ唐韻ゆ瓦器と見え今俗漆器ゆ音をとて盃とよぶその其形の似るは成べしとて槃の属也　吉来神宮贄土師の居所を宇尓と以ふ式ゆ多氣郡宇尓神社と見ゆ是ゆ大淀のつきなりしが今は居を南ゆ移せり里人世記の故事によりて天平瓮を造りしが今其形状をとりて朝夕の御饌調進の土器を造り奉るなり　洪水なて豊受宮正殿の下ゆ

天平冤を漂はせし事は鳥羽院の時なて百練抄に見え
多り　住吉の神事に預る女子に此称あり平冤より出
る事といへり　いらかの鴦は出羽の平鹿郡より出
る鴦をいふといへり　新六帖にあり　平賀氏も
東鑑に見へ元弘に護良親王に従て十津川に匿る
赤松律師則祐村上義光平賀三郎こなを三傑とも
と見えたり　古事記傳八十毘良迦の條に八十を数の多き
を云ふ毘良迦は毘字を書を八十云々可見えたりこは平
冤の義ありやなりやは定りがたけれとも
えねや平賀をいとく古き郡なり続紀廿二四十七代淡路
廃帝のみ世に天平三年云々己丑勅造陸奥国桃生
城出羽国雄勝城所役郡司軍毅鎮兵馬子合八千
一百八十人従去春月至于秋季既離郷土不顧産業朕
毎念茲情深矜悯宜免今年所貢人身挙税始置出
羽国雄勝平鹿二郡云々世七桓武天皇のみ世に延暦
元年六月丙午朔出羽国言賓亀土年雄勝平鹿二郡
百姓為賊所略各失本業彫弊已甚更建郡府招
集散民雖給田未得休息因茲不堪備進調庸望請
蒙給優復将息弊民勅給復三年云々と見え後名抄
に平鹿郡山川大井邑知々見えたり同書に国府在平
鹿郡にあるは桓武のみ世に建郡府招集散民を
見えつるそのまゝにおそらけめり同郡亀田子郷

平庚村あり此處なん古郡府なんど建おられ給ひし
舊地なやなる不考へつゝし

まゝまゝに以ものゝ

六郡を雪月花と詠て山本秋田の二郡を花と出羽道と名附
て河邊仙北の二郡を月と伊底波路と名附て平鹿雄勝の二
郡を雪のいではぢと名づけつゝまゝそゞ中なを巻きゝの名
あり　巻ゝに莊と記ゝは此地なる澤てふ事えそそ
莊を澤と記り傳ふなやと考へなゝ為る禄ゝ秋田
方なハ某澤某澤といひ津軽なハ某組某組といひ組て
てそもの見えられと凡莊なあられりゝ沢といはそ
方言も他邦聞よかく右ばそそなへて莊とそ書ぬゝけ

れぞそゞ中なを古への莊ありそそ雄勝郡なる駒形莊秋田郡に
率浦莊の名ぐひ伊特宇羅そちら野と成り今ハ田畠
の字のみとなりて殘ゝり

巻中に郡邑記とあるは岡見氏青龍堂老人の編集なり
そはそな享保の時世てそのむかし世そ聊事ゝハれる
處ゝありゝ此記なを文字假字の名ぐひ一名しぐの
れむなめげなる事なゝら是を紀し古名をさぐりそ
て書そふもの名ゝさえ短く筆のおよびかゝ記をお
く甚多ゝゝむこそ見る人ゝゝゝして見ゆるし
給へ

雪出羽道

平鹿ノ郡部

杜のうちの鵠　角間川　角ミいしがみ　袴形
きうち野　門野目　ものやま　吉町
布さらし化宝　新角間川
根田川　百萬苅
うし柳　黒河
こする田　板井田
北三のうち　松田新田

九箇村

角間川 加久麻賀波　里長　幸四郎

加久麻と河熊河隈なとも見えまゝ草に鳳尾蓮とてそハ鬼抄羅ゝ類草根ありまゝ馬に騎ぜるハ鐙もて打をかくを入はゝゝ語あれハ騎馬北義ゝやとしいゝる人なりいるぐはらむ永慶軍記、撰本、戸澤治部少輔盛安が妻ハ由理、郡ゝ在る根井縫殿介勝吹が女なるて角館、右京介政盛が継母ゝ其母にいざなハれて落行けるぐるの記行の中ゝ羽黒山まるりのまゝをしてなく〳〵已が館を出て人々ゝ別もたゞて行先ゝも敵の中なしハかなゝゝ那ゝ道を引きちゝて橋岡大曲を経て河隈川を渡り夜又鬼山の神をよゝ拝ゝ平鹿沼館もやゝ近くかくて移宮の邊りなる経塚ゝつき

て一夜を明やすらかに見えそうし此處に今は内河と云ふ
むかし河曲川と云し処なれて今は藤木（藤木は槻木をかく言ふエニヅの葉の藤に似られたるゆへなり）
郷に藤木（山本郡志戸橋の支郷）と云ふ邑なりの渡りとなるむかし生て鬼英の古木生
る地を郡境とし今は變地て内河をもて郡堺とせりもしこれ
ばかの角間川（内川をやゝ郷名とせり）を平鹿郡始とせるも之る郡邑記に
家負而久拾壱軒東は仙北郡金沢西根の支郷大久保村ト川
ミテ境の西は同郡内小友村の支郷宮林ト大川デ境の但し河向は當
村草苅場処なり北は仙北郡藤木の支郷八卦村ト河デ境の
に角間川給人七拾三軒左は梅津半右エ門組下也云ふ横手（三里ナセ丁半歩）
大曲（三里廿五町十間）花立（三里八丁四十五歩）今宿（三里廿四町五十歩）沼館（三里六丁八歩）田村（一里五丁十歩）
云ふと見えたり是は享保十五年の記録なれば百年も近ければ

今一世とそいとかゝるなる事も多しさりければ此記録は
武とをるゆへと正しかり記角間川郷は南北は往復し肆家
は東西に向て立並上ミ町中町本町と云ふ北は内川（内河古名かくま川）
て仙北平鹿の中河なれば河限川と云ふ平鹿郡に屬なり
むか仙北郡藤木村の枝郷八卦（八卦は八景と作り此村名同郡金沢西根にも八景あり真澄
抽は八ツケと云ふ処いとゝ多しこゝは端郷なれども坂尻なれども八景あり処も多
し八ツケとは八ヅカケの急詰なり雄康の寒風山も古くは八ヅカケと云ひし
を寒風とあらためやゝ好事の人は男康は河の邊の村は綱舟戸
渡るに南は迂にその陌より南へ行るは浅舞へ出東方は横手
へ往来街道なり角間川は市日なり三七の日に近き世加市
とてそれは今一日を增て一三七と云て正月十三日は初月に
してまづ本町立ぬ此日は市姫の神を肆中に祭る

てあきなひ物ゝ千代をいのるあき人七おき衣着てやゝ飽と塩とを家毎ゝ買ふ例ゝ給人町とゝふあり梅津家の但子武家ゝて上村町四戸村町大籠町天正文禄の頃ハ此所より河渡りして大籠川の名あり苗代町今ゝ裏町ゝ中村町下村町新町並て七拾三戸の世を七町ゝらしが新町をいとゝ蒲窪なる地ゝて水のゝめに憂患多く享和の洪水ゝ河曲川ゝ川をうち溢れて栖家ありうらうしうバ人ゝなるゝ町にうたり栖て新町を今絶先て名のみ残もり給人汐に社あり八幡宮上村町今ゝ上町のこゝゝ座り末社稲荷神社毘沙門天王社此武家町をゝなる小野寺氏の庄等なゝハ昔在りし世ゝゝきゝおつりし沼柵の若宮八幡宮を此地にうつし奉る此市神をゝゝ前神山ゝ鎮座市神なゝゝら小野寺城中ゝつし奉りしを洛城の後ゝて いゝゝゝ墓奉ゝとゝその由来沼籠のくゝゝにつぼらうなり別当新義真言派ゝて最上法幡寺末寺寶亀山喜福院とゝり祭ハ八月十五日なり喜福院内町ゝ在り舊社地下村町ゝ在り此處ゝとゝ此梨の大木ありそをクワメイ雪液とゝ此梨菓の名ハいろなるよしにや甜梨子を加冬梨とゝその字音を謬り訛ゝゝさりけれど此梨子ハ實のゝとゝ小を冬になりて雪のうゝふるゝうゝ喰ふ心きゝとそハ美濃の中山ゝ生る姫梨子のその話に同じゝゝつねゝなる梨子ゝて採り喰ふに甜らねハ乞児の梨子と人みな置ゝくむゆゑ序

居梨子よといへる事をクワタイとあやまりてよといへりこそ
うべなるべし此梨子ハ此角間川の郷端茅の頃より在りて館
町のいへりのさいかちとそいふれり久しくかくむなうむかし此梨
子の樹の下に鎮座健御名方富彦命の祠肆家町ふい
つきやたる諏訪神社是を修験祐教院が守護社と
本肆の裡ハ河端よりむかし仙北平鹿の堺木の大柳ありそ
ばに社あり稲荷御神と其由来神社のくくりふ詳ハ此
社の在りなりをさして旧館ふいうなる人の栖居をも知
らじといへりおのを考ふに同郡黒川村ふ古城あり黒沢長
門守基兵衛義道家と軍功ありしふ野寺落城の
後角間川の館ふ移まりといへり此事黒川村のくだり

ふなるあり此黒沢長門守道家の旧館なるもかなるあ
ぬべし大楯町大館ふ作るハ町ふむかりそハ河の岸なり
永慶軍記沼館坂のくだりに戸沢九郎盛安ハ角館を
出馬して六郷を過き大楯の渡りして布曝の里を経て
阿氣郡を前りして陣をとる云々見へたり此事新角
間河のくだりふもあり云ふべし瀧沢氏ハ坊ふ在り上祖
を由利郡瀧沢城主とて瀧沢又太郎光維二代を瀧沢右五郎
光行ふ此又五郎光行の世よりはじめて小野寺大隅守輝道義道の父ふ
る仕へ今十二代瀧沢三右衛門道敏といへり家蔵ふ豊嶋
大學助書翰通ふ其外の古文書あるが中ふ其ふ又太郎
殿へ新田義興といふ書なども見へたり其外の人ふ小野

寺家由理十二統の後胤なりと云ふ　落合直養物語月花集撰者山方泰通なり雜下ノ　先君角間川の御つとめ行ひよりその郷のならはしまて厚きおもむきなど賞し給ひて賜ふのなとありしと記よめる　おもひきや深山かくれの朽木もめぐみ給ふのかゝるへしとは

直養は落合文六角間川給人落合荘兵衛其叔父と見えたり此儒者を朱子學武むねいろく人を教てくれしの道をねもころにいとく厚き志ある翁と此直養いとく初生のと記ある能のもとなるその事なりしてあるときそのぬし紙筆墨などある童を賜ふるを見てよむ紙を素付けの歌よ

ふるとも世の木のつゆのかゝらぬそうきとよ絶るうのぬし見なをひとこゝをわ童て云ひしかの形とて筆墨紙などおなじさはらはひしとなむ　詠り傳へる

神女境内士坊新所ノ在りその中ふ〜さうなるねで人のかゝりのまゝ〜旭塚のくぶりよつゝらかよいたん

獅子舞　八月十二日ふ沼能の若宮の獅子頭をいなときて此獅子まひ来るそのむかしの野寺輝道京ふ在て後ふ路ふて獅子まひを好ひぬ中錦織氏ふ倣へなりとも之りかの獅子の場端をかこじとふ錦織を訛り云るか舞さ内もおもふ黒き假面をかむる童なり是をそもゝとふそそそ〜集ゝとせの唱ふるまゝ〜走りいる名なむまゝ千

島五種麻なとと云飛くの曲りもの四つ角なるを而ふる一トさ
ばらまても降うされたるを清めの雨といふといいり

神社

鍋の稲荷明神社　てを此角間川の郷の旧社なて地主
の御神なるをー奉らんかむりー高橋九郎兵衛といい
ひー大福人なりて此に齋奉りし神社なかのむかーの都堀
多りし皇英子としる空木ハ此社の左方に生ひ立てり
まさ社のかはらは塚なり此塚のもとはハ白毒女すめりといい
ふ今そなりやなりやや穴口にさるやうなる雞居立多り高橋
九郎兵衛が祭りし社なて九郎兵衛いなりといふ人なり高橋
うち此鍋町なる今そひんぐるの栖居して商人なるなるなり
なる
四外面太神宮　此神社なる本ト梁田氏甲州屋幸四郎
とふ俗別当なり
里長なる人の上祖の齋ひまつりしなりとなりとなり寛文
八戊申年最上義光の家臣宮内主殿を祖として此神宮地
を守護奉る祭日六月十日とする賑ハ二代目より
鈴木氏多りなる宮三郎とふ三代鈴木豊後守四代鈴木
勝之進五代鈴木周防六代当代鈴木伊勢正藤原清武日姓
清勝なり
諏訪明神社祭日　愛宕社祭
此両社別当修験心學祖慶安元戊年重覚院とふ二世

大泉坊延寶八年四月八日化三世大行院正德五年九月十日
四世胎藏院元文五年二月廿日化五世祐教院安永四年六
月十七日化六世文殊院享和二年十月廿日化七世當住儒祐教
院龍全なり

浮島明神　小嶋中と云處に在る杉丸の中座（マセ）なり
七面神を斎ひ奉る此社は八月なる洪水（ミヅ）のときも溺るゝ
事なし　稲田郡麻生の菅神御社のおとくまるあるじ阿仁
なる道場村にうなあるじさまの物語ありしに　稲荷
社なりしきり内祭は四月十九日別当日蓮宗覚善寺
炭岩社町頭と云處に座（マセ）り祭日六月廿四日祐教院守護
社なり

寺ノ部

本妙山覚善寺寛永十七庚辰年建立開山智玄院日甚是
聖人越後国寺泊法福寺より入院寛文五年乙巳三月廿八日入
寂之當時十四世玄妙院日英代之本院伊豆国五津ノ妙
法華院なり

覚立山浄蓮寺浄土宗門開祖三蓮上人慶長十八年
癸丑六月廿四日化安永三年甲午四月四禄しと古記付物過去
帳まて焼亡して寺の由来つまびらかに當時十九世洞雲和尚
なり本寺仙北郡大曲村無量山本誓寺なり

東本願寺流大森山長慶寺開祖大森郷に住居せ
ゆえ大森と云て山號とせり此寺四禄して世代傳ふ當十

九世幼少千代麿と申す者司祐憲

奇談

慶安のころならんある浮浪人姙める妻をぐしてみちのくよりおくゝ来りて文字の山中にてその妻ときりはらわりて子産(ウミ)ぬ(なり)妻をいたゝき草をしきなどとかくして日をくれども夜半ゆゑ(おそ)くときりの眠のさめぬれハかゝるゝなる岩を枕としてぬ(ね)ぬもの(者)をるなねさめて見れハおのゝ家ゝとゝごろめ(ゝ)仕ハたりしか女のさゝ(ゝ)いろこゝろうるはしき女ゝ来てねもころに妻をらをけるゝるをあわゝき事とおもひおどろかめる子を妻ををいしゝくゝとかみぬるを恐ゝとを山姫なゝどふものならんまくき奴ッゝなとゝんびらぬきをかちつま子のあぐとうちかくれどをが身ゝ多ゝぬとをゝとをせびその眼の光ることゝ鏡のごとくゝ牙の毛ゝはたちある木のゝれはかきのかりてかゝるき命をやたくし夜明るを待て木ゝ下れを妻ゝ亡かゝハ骨のみ残りぬゝをゝさるものかゝろひあんゝとをゝをは出て人里を待て十日廿日とをゝかこゝさゝ多ゝひ出羽国ゝ来て平康郡角間川ゝいゝ世中の行おをおもひて自ゝ浄土宗川なれハ浄蓮寺の弟子ゝとなりて名を權齋ゝふ風の權齋ゝを出ゝとなるゝし權齋が山焼ゝちゝ多ゝし太刀を無名の二尺九寸にてそ肥後守国虎ならんゝふ人ゝ今ゝある人家ゝ藏ゝ其

山姫と見しハ非なるべしとぞいふ　そのあたりなん權齋
角間川にて死（シヽ）られバ人々塚を築て近きころ碑を建
て權齋遊士墓ととゝるしぬいろものへうた戸の城の後
人などゝて名をあらハすかゝらさうそん
旭塚といふ　ありいろのまろなるもむら朝日神子とふ
行ひ尊きみこありゝ者を老ともなりされど吾れ
思ふ事あり神となりて民州を守らむ穴を堀り塚を
おくべしと人々頼めばしかるべきなりとてみこ
のねがひのゆゑ〳〵堀りとゝ近き世まで塚の内
は鈴の音聞えしとゝ今も塚松も枯ていとあれこ

今みこやしきとて新町といふ土坊ありそハ諏方社の
旧地（フルミヤドコロ）なれバ諏訪みこなりしゆゑよりそれとさだかに
知れる人なし
河隈川川しりふをさかのぼれハ笹巻とゝふ処ありそこ
るいとゝ大なる蛇をこめていへりきとて見る人ありそ
のとゝろハ沙虫ありて人をさせハ死ぬそのあし此沙虫
てふそのハ蛇の子ゝ付ゝ出るゆゑなりむとゝいふ雄勝平康
仙北なるもあるよりおなじ国なるもあるゆゑ信濃川の流のまゝを
ありて越後の国なるハ鴻虫といひまゝ蛇虫ともいふ此虫
雄勝郡逆巻とゝふ処なるむらハとゝ多かりしが今ハ
ありなん御膳川のまゝ北をゝるぬこの笹巻逆巻

名を能く似たる川の名なり

角間川を母郷として分れる屋号村々八箇村にそはみな法物川の東西に在り所謂寄郷に法物川の東にて黒河石万苅門ノ目新角間川より法物川の西に板井田福田新田袴形十日町之志ノ八ヶ村

門ノ目村　十一戸　里長　半介

郷八法物川の邊りにて街道より西にあり道の東にて田村分にて福嶋村より枝郷　木内村十五戸宮地木内悪戸北安久登と云地にて多しあくなくこと云て倭名抄に糞堆を訓せりふる生の義なり俗語のあくにも本北言より轉りしなり又悪態の奇なり吉事記に見ゆと谷川士清も志ノ八ヶ村今の塵塚の字角

祝ひあぐた火とよめるを三河の寄せ焼信濃の六ー火
といふ　木内上ハ殿　不動明王堂　郷中巡り
別堂にてとりつき奉り祭日三月廿八日
此祭日は久保田保戸野棚谷家今ハ絶人より白銀二泉祭
祀料の手間ありゆゑよしある事なるやあの不動尊ハ
いられさるこのなりねと霊像のよしを仰ふ

新角間川村　廿七戸　墨長五郎
此新角間川村を角間川間きとゝいひき古名を布曝
里といふ稲郡新城荘なを布晒といふる地名支郷
中野村五戸
此布曝をいとゝ古き処ゑのむかし布曝しこゝゆゑ
ゝなりてとゝりいふる処なるや永慶軍記沼能攻のくだり
に戸沢左郎盛安ハ角能を出馬して六郷を過き大梢
の野渡りなして布曝の里を経て阿気を前なして陣
をとゝるなと見えるなり　字所　松山原
一本木村西之　沼端　布晒し来し　佐戸樋　布晒し大束し
清水下ノ方五郎兵衛田地ノ辺り　八万苅り是を木村の名なを間えたり

神明宮をいつきまつり村中の守護社なり祭
四月六日

稲荷の社　田中彦七祭る

百万刈は本ト百曲りなる俗言を百万刈と書なしつるなり

百萬苅村　七戸　里長九左ヱ門

此村鵜渡川の西に在り田三刈を云ひ斛を云ふ處にそのさまなりひろく凡是を云ふ二万三千三百三十三石三斗ほや鈴録に古制知行とり百貫千貫といふ今奥州なほ此称残りとり田一坪に苗一把種て百坪に百把種るを百目といふ千坪に一貫といふ大抵十貫を百石百貫を千石に當る上中下田よりて一定せんと見えたり

枝郷　上根田川村　三戸　下根田川村　十四戸

落合村　十八戸

神明社枝神　金毘羅社　荘左衛門の守護社之

若宮八幡宮　祭日庚申八月十六日　百万刈と根田川の間にあり村中田制當祭日三月九日

古碑(エリシ)あり石佛(ケ)と以て西方州の西田邊りに在り磨滅して
梵形のさまや見えて其文字さらに見えず墓碑なるべしや

田島ノ字(アザナ)

古屋敷

稲小屋

寺跡(テラヤシキ)　大表村大慈寺の旧跡(アト)の
ごとし

鵜渡川(大石川と誤り唱ふ)　此川水ト空川(ウト)なるべし

立郎兵衛剏

鐘剏

櫻剏

大剏

表那(うけ)基剏

尼剏

真乗寺剏

外ヨ字

葛野(クズノ)

釜蓋(カマブタ)

黒川村　今世二戸　里長　長兵衛

世村名いと多し秋田郡川辺郡其外にもあり中古黒
川三郎義康なと聞えたり郡邑記に家負五拾五軒北
八仙北郡金沢西根横手河向當村地形入合之附札金沢西
根村黒印に所入載云と見えたり

支郷

落合村(今十一戸)　同書に九軒北七仙北郡金沢西根と當村
横手川向河原ニ境ヲ横手川鵜渡川落合ノ処故落合
村と云ふ

今宿ノ悪土(今)十七戸　古ト四軒北仙北二本柳村ト横手
川向畑ニテ境ノ地形入合之

横山村同名川辺郡ヨリ在り此横山享保の比まて一戸有り
しかる今敗村となる

下モ上野　四戸　上ミ上野　十四戸　田中　六戸
鶴巻田　十戸　餘ん目　二ケ保同名あり　廿一戸
南谷地　六戸　牛作　柳　四戸　妻茱萸　目名ヨリ作れり

二戸　西野　六戸　浦嶋　四戸　千本野本千野とい　ひしまし

館ヨリ黒沢基兵工

神社

白旗明神　黒河村ヨリ祭　九月九日　白幡御神を処々
ヨリ在り此神社ヨリ

白山姫社　一本木と以ふ處ヨリ出せり　祭日三月廿六日此
社内ヨリ浦島太郎ヨリ礫石とふ有り

神明宮　本ト村ヨリ出せり　祭八月廿日

龍神社　河原村　佐藤清蔵　齋ん

稲荷社　下モ上ノ村　孫左ヱ門　齋ん

大日堂　牛柳村　兵三郎　齋ん

浦嶋ノ社　目名川村　物右ヱ門　齋ん

寺三ケ院あり

京都西ヨリ八條大谷龍谷山本願寺末

黒城山浄国寺　一向開基行西文明八拾年當村建
立遷化年月不知十三世浄国寺行事

京都西六條大谷龍谷山本願寺末
三黒山正善寺 悪戸と云処に在り一向宗の當寺
開山は何人と云ふことを詳にせず 本尊 釋頂 住僧 天正十
六戊子年七月法名淨順 文禄三甲午年十月廿五日入寂
十四世正善寺當住淨曉

古城あり西野修理亮基と云り

康和日記に保
品川山の宮侍る
芳賀 鈴木 多
芳野 宇垣 保太
遠藤 久名平瀬
佐々木 此十人の佐
間當麻 板井田
云と見えたり

板井田村

假里長 三郎右衛門 莊之助

此邑御物川の西に在り旧地を平野と云ふ 板井田の古名亦
比良野なれば享保のころ改めて平野の地名を改めて
板井田の名をもて物名とせし事なるべし

枝郷

板井田 一戸 境田 一戸 平野 八戸 小沢 今は村なし
小樣田 一戸 道目木 此三戸 山崎 十二戸 水沢 七戸
小水沢 廣村 作野 一戸 小中嶋 二戸 杉野
沢 四戸 北野沢 一戸 下ヶ田 四戸 新所 八戸
かゝる小村ども詳しくとあらず

古蹟

萬太渕 級の木生し渕をいふるなり 科を級といふ

級なとゝはら山賊等ハ方言ヘ
嫗杉 平野より西一里餘大代村大屋山に在りそのいはし
へ仙北本郡郡神宮嶽に居る鬼賊を平給ひてむと坂
上將軍田村麿神に祈り此杉の本の寒水にそゝぎし
身もきよまりあがりけるに額に神もりけひき結
ひ付たる根を一株にして五尺斗生ひのぶりて二本
となりて相生のごとし此杉ハそのゝち紀さ一おける手祭
の幣帛とせり田村將軍こゝぬさとり祓し給ひしゆゑ
清水を御手洗川とも祓川とも云り毎の六月朔日に
拂ひをとて平野の長八ら祓ひきよめ奉るなりし杉
を根ゝて周囲八尋餘りめぐりとり近き世に此大屋に
兵衛と云村民三千七百本の杉をうゑるうゑし物語り
をせり此大屋山を中ゑより始てもとも古き地なり
○多毋木 平庫郡にあり太木ゝ此木を平野の東の皇中に在り此
木なるをもて多毋木野と云ひしが今ハこゝながら田畑となる
杉り古木也 霹靂その火よりやけて今の大木を蘖なりと
ふるゝもきの刈名を月桂と云ひ上総の国に方言を云
ゞ又伊豆の国にふくろ多毋木と敷肉桂なとゝのたくひ
ハ皮でその名をおなじけれと木をもものゝ藥にいふ
桂皮俗言にあをぎをなをなをだぶなとゝ云欲ゝ杉ことゝ
あ木ゝ稀なり

○神社

○大神宮　故神蔵王権現社　祭日　古は六月十六日　今は五月廿一日　古名　千苅田今云ふ

而目木と云ふ地に座りまする大神を齋奉りしゆゑよし

なり〳〵御鉾の藤原秀衡朝臣の時世の事なりとか暑捕沼

とていとく大きやかなる水沼なり朝に東を通れば人の影雲落

しその人やかて水に溺死ぬまた夕日照れるころ西の方を通れば

馬に乗れる人に乗れその影束まさして馬人沼水に落入るなこと

氣消え魂身にそはぬ心地して人こを恐こと文暑雨ふる日の

〳〵そこを往来して万民うちなげき御館へ此事うれ

へてうるをしてとうば秀衡陸奥国出羽のくにぐに

千人斗呂はるうなる五十鈴宮を選まつりて幣

手祭祥びぬうづきあるもの横山のかくさけていのり給

へ八日毎に空うち曇りて人影沼水さこで人々声をあげ

て喚き叫こ夜を日につぎて炬火空をあかして夜ひるよ

りもあかくさばかり大きな水底ふかき沼水を千七の人の

力をたくしてくみ乾ぬれこひちの波うちさとぎ尾ひ

れ打ぎきこひちの雨をうちはそのあり様を其なか

むとまうちの人とかま鉏鍬を投やりあふをとやう

のそのをそをてうちころしてみるを見れば世に云ふ杜父魚

てふものゝうけ丈あるがれるが墓の形ていとく肥こも

ありその化魚を陸に引上て多毛の木の串にさしつら

ぬき頭に多毛の木の杖うちてころしつ此多毛の木生ひ

つきてをしおて生ひ延ひ空木となれば変化魚の霊魂大蛇

と化りてあやまち事のみ多かりしが一とせの夏霹靂して大蛇もとうるれ多毛木も枯れてしがその根より蘖の生い出てし枝葉茂り今は三四十間四方八方へ亘根元は十尋計も周囲なりむといふ大きさの人群れ居て晝飯喰し鍋のまま芭山となる計残りたるかの山となりしそのを今に至る楢といふ千人ばかりけるうしき料のまねぶくたるる処を米山といひて阪の森といふ小山の尾つきあり山城堰とてまゝ立ケ村せきといふ東の公の勤功まて御物川の水をまわせてあまたの村民ら苦ふ此水此山根を流て仙北郡まつといふ所にて秀衡朝臣通て給ひし沼後の大橋をとゝせりそを御倣のとゝうし給ひ

ひて秀衡橋といふ名その名残りて今は袴形村の井堰なかりたる橋といふ此大神宮を古大林といふ処を鎮坐を寛文の時し千苅田今云ふ百目木といふ地ようつし齋ひまつりしを今の御社に社僧なり修験者にて快蔵院といふ此快蔵院が上祖を山野寺家臣なて滝沢彦右衛門基といひ武士なり文禄のころ修験となり慶長七年正覚坊といふ入峯行ひの後は快蔵院栄順といふ天和元年辛酉正月朔日行年八十餘歳にて入寂し家蔵重寶前祖の鎗一板紀和寺宮御作の泥土の観世音一軀本尊不動明王古佛雲像のよしとゝり当住七世快蔵院亮盛なり

八幡宮祭日八月十五日平野村なりなり田村暦の

建立なりしこやとまろこと、源義家将軍再興なりそ
後まち野寺氏造営ありあるよしをいり平野より八乾の
方に八幡平とふ処あり此御神の旧地こ義家朝臣夷狄
平ら給ひむとてこゝに幣ぬさ神に祷り給ひしところ
の跡こ八幡比良の南に移野沢とて村ありうへ八そ
なうつきまつり近き寛政元年己酉秋八月十五日再び遷
し奉りし八今の平野のこやところこ鳥橋日向正ら守護
社こ正徳より已前八此御社を守護し奉る人をなく乱れ
ふる世のありさまうしまくも神をよそに見奉りしと正徳
元年八沢五村の保呂羽山のかこぬし守屋家の次男守太夫
とふ人はじめて此板井田の八幡宮に仕へまつりしよりと

傳ふ初代鳥橋若狭守藤原吉保享保二年三月二代日向守
吉林享保の末の人こ三代土佐守吉森宝暦年の人こ四代多仲吉久五代
藏人吉近六代忠太夫吉金当七代孫日向正藤原吉政
こもかゝ此猿田とふ処に住こ今八平野とふ村に住り家に古記
等も傳らん村老の物語に八幡宮の由来を聞のことをいり
白山姫神　祭森山にまをせり祭日六月八日社守快藏
院真盛なり
白幡の神　水沢山にうつきまつる祭日絶てあるかなきう
にあれ侍せる八叫ぶき事なり
薬師如来の社　水沢山にまをせり祭日四月八日村民齋奉
る此夜久瓢山の麓に会併庵あり角間川村の浄蓮寺の枝

寺なり

笹谷明神いにしなる明神なり白山姫の山の外山の上に座り

舊地

岸氏なり上祖をそれとつたらこのなりかねと天文弘治のころ
より此処に住るなりを読なり今の千刈田百目木の古名の家に正徳
の頃建しといふべし七柱ならん軒端かるふきて見えて庭
にかまの鴨脚木あり白杤椒なとなとなり
古彼の跡あり以世にこの形る人の住しといふことをそれそ
なりなり　庚申社なり百目木村伊藤喜左衛門建り日向正
守護社なり　左門保伊達左門貞家といふ人の墓之伊
達某横手の上野墓といふ処にあり時世動當あり

てそこなくさなりしてありきて此水沢の卯右衛門といふ民の
家に子を婿に病ありて子まうれそのの墓碑に玉翁祖白
大禅定門寛永九年壬申四月二日とそ伊達三河殿の養
子なりとも之り今世に卯右衛門を墓守りとなりて伊達
貞家の亡魂をとむらふ

板井田氏姓なるもいふ八沢木保宮羽山下居宮祠宮遠
藤氏の系譜の内に上祖藤原勝親より九代右近正成人の世
にあるして當山宮侍芳賀鈴木羽多芳野宇垣保大遠
藤久名平瀬佐木此十人に佐間當麻板井田少友上溝星
山羽貫星宮是八人四沢加勢遠藤大友之依背ニ新山
中騰勢依之清将軍武則公より和談ニテ鎮れ之と見えて

松田新田村

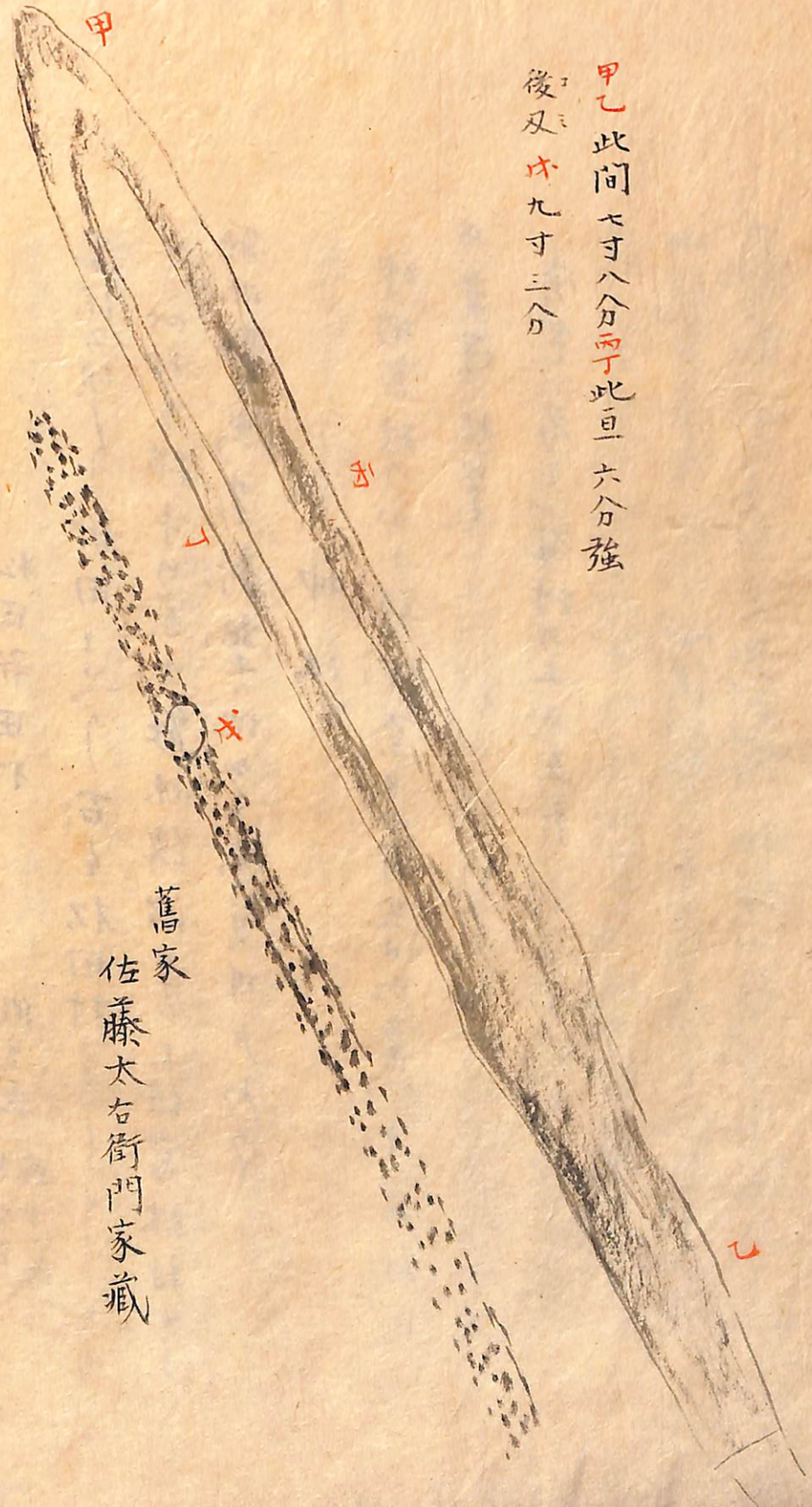
假里長　太右衛門
　　共十郎

享保の頃より新田と云ふ　古名松田村と云ふ
此村と横手の家士　能味傳治某の上祖宮林村の
能味勘右衛門某新墾の地なり家貢廿戸あり

神社

神明宮村の西小鎮守　祭日四月廿一日六月廿一日
の守護神なり

庚申　右村の上に立る



甲乙 此間 七寸八分 丙丁 此間 六分強
後刄 戊己 九寸 三分

舊家
佐藤太右衛門家藏

袴形村

假里長 甚三郎
助重郎

此村名いかなるよりてとゝ問へハ古老の傳へなこの村の千手堂の盛りなる猿田鉢位山八千坊行ひありしなるなるべし村なる統をなりてなるづ此村なる統をなして白き麻袴を着てをしくうち辯れ山なる登るを見て時の人ら袴宸と云ひしなハ村名なる呼ぬ本ト袴方と作しを近世なりて袴形と書もて其始をとゝ問へとゝなる事とそハ白袴とせいふへき事なるハとゝひぎとなるなる雄勝郡なる赤袴村あるハとゝなるおそらくなるなる記ぬるもく此邑ハ正保四丁亥年板井田村より分村なる処なて其地名そいとゝ古くその村ハ近世の邑家ハ家数凡九拾八戸と

以郡邑記云り越前林村世七軒寛永年中越前国浪人越
前と云もの開発の地こ神成村十三軒砂間村廿三軒泉橋村十
六軒和泉と云もの住居の地こと云一本柳村六軒云こと見えたり
越前村の六左エ門と云者享保のころはじめ地と此村民の話に
せり考る　神成村十日市村ハ交北り神成ハ陸奥国磐井郡にも
同名あり中ハ嘉成氏も本ハ神成なり　砂間村此砂間
と云名も所々に多し　泉橋村ハ此後のくまくで
泉治左エ門と云浪人此処に来り新墾して住し家柄の跡
ありそこに小橋あり今も泉橋と云そがまその国の産し地名
を姓として今ハ高田甚三郎と云家あり　一本柳村ハ古年
往し大柳一本ありしの折ゆゑる物語を傳ふ　大堰ハそ

の寛文四年甲辰三月の頃よりこゝらの人を足りして延宝三
年乙卯秋まで十二年を経てやゝ田井成就し大森の南本
郷と云処より御物川の水引入て是より南の方へ大森十日町
袴形板井田内少友その外大曲西根まてめくりくして幾久町
と云事を定て村民の間に我家殿の御めくみなれさ
りしハ立箇邑堰まこの名を山城堰と云今もその世の君の
勲功を忘るゝなきの尊あり

神社

神明宮　砂間内村に齋奉り社内に庚申碑立て　大
悲山千手観世音ハ紫銅の七寸の立像にて国仁大師の開
元の世菩薩なり　雄勝平廣仙北六郡の巡めくり順礼八番

の北所なりその千手観音座バその御山を大悲山とふ蓮華の池とふありやうひらがし蓮ハ護摩堂とて宿祥坊う古宅の跡之南ハ板沢とふありそこなん影取沼埋し時板敷渡ーゐる処なり了西岩積長嶺とて保呂羽山ゐやうつる人やうにやうく報奏のとき御山端してうつて此岸き地ゐぬきつこてあげるハ大峯をぎやうのと紀鐘掛峠ゐぬきつしてうづゐ上ーうけれハ復積長嶺とハふと之ゐ北櫻なぐねとて大なる櫻あり此そもゐやうづる人みな首ゐ輪注連を掛る此輪注連を両部習合の家ゐ注連袈裟とい社家ゐハ注連縄ゐく幣手縄とを云り下向のときそのぬさなぐゐき又ゐあげきとなぐねの櫻ゐかけて

帰れハ注連懸櫻とい了此千手観音の別當無量寺の祖ハ大森の城主小野寺孫五郎康道ゐ仕へて大森落城の後ハ浪浪の身となりし山本民部介と云し武士そ古郷下野の國佐野の其郷より持来し家ゐ伝へしものなるちりしがうせて其後つるそのハ宝寿ちうちし九寸五分隆三世夜叉明王の像極彩之其後仏師の名を知らず八幡太郎義家将軍の扇形の花書一枚ありやうく千手観音の縁起あり此ゐ天和元年辛酉宥別當吉祥坊宥男円三年癸亥十月十七日入寂と記せり二世常覚院大祥坊永界享保六年七月廿日入寂三世蓮寿院吉祥坊宥仙寛保元年十月九日寂四世教蓮院大祥坊宥光安永二年四月

廿六日寂立世蓮寿院法蓮坊宥全文化五年五月十八日寂
大世無量寺大祥坊龍仙存生當住七世後住快圓之此當住
大祥坊龍仙の世より無量寺とふ寺號そはじまりそるさら
とるなり

立石神（メテイシガミ）村の艮（ウシトラ）の方の山なせり此石神の道ハ弓手の方
ゟ子守山にて墓地ありそゝ樂なる秀衡（ヒデヒラ）稱いふ〳〵秀衡朝臣渡ゝるよりを
ゟを渡りゝと其石の高二丈計の大岩之續絶世古巻ゟ経
畧鷲座（ワシザ）稲座（イナザ）稲石沢大菅屋柳沢等五道斬木塞（キリテ）
徑陣備作（ジンビサク）險以断（ダン）逆賊首嶺之要害云と見えゝり此
立石ハ文字（モジサマ）かゝれどもまろ〳〵ゟ多しまろ〳〵ゟ石神沢の南ゟ柳
清水ありまる猿田村の鉢位山にて此處（コヽ）より遠ゝらぬその
山の禁ゝりに柳沢とふ名と聞えゝりそをもて考ハ此
五道の一二ハこゝゟ在りゝるものゝなるほゝぶぬべし其石神側
ゟ藥師佛の小祠ありゝゝ此村ゟ在る嘉左エ門とふ家の
御ゟ安置まつりし佛なりゝ紀夢のゝさがあ
りて正德のをゝめなゝんゝ此稲石神の山ようつゝ奉り六
月八日ごとゟ祭ゝゝゝ了其近きゟ臘田寺ゝゝむかし
寺のありしとゝゝる蹟ゝり鉢位山ゟ在りし大寺の枝寺
なるべしや

同名雄勝郡
ニ在リ七郡の七
里ニ名ヲ付シ
載ス

十日町村　里長　荘兵衛

此村御物川の西ニ在リ大森の隣村ニ大森城下なりし
時市ヲ立し処なり郡邑記ニ十日市村と有り
二ツ森　九戸むらし其森林杜と二ツの森ありしとか
女郎出　十九戸ありて大池ありてその池の邊ニ端正
しき女の出て児ニ乳ふくめなんとせしを人みな見あり
ミて語りそそ池ニすみつる大蛇ニてありしとなもい
ふ其池水涸て今ハ田となりと志る女郎出村の名ハあ
りと村の人の云り
神成　十戸大柳ありしニ霹靂してその大柳枯ル
それより雷なりの名ありと云り

劔の花 九戸本ト劔箇押なるむを鼻と宮(カキ)さ
花とも少り ゆゑすゝ多りれど大森村のくさるよつ
ばらかよ記てまるよを畧有ム

神社

大神宮麻釜山 むかし保呂羽山の神の供鐘鎌し処ゆゑ羽山の名あり よりきまつ
りし所神なるら今ハ何のべるうつしまつる 祭日三月廿一日
修験明應院 宥世宇護社也
稲荷社 十日町ニ座り 祭日六月九日 宮守日上
藥師佛堂 二ッ森ニ在り 祭日七月八日 宮守日上
修験明應院家系
開祖 乗覚院 寛文十年辛亥二月九日入寂

二世本明院 元禄十四年辛巳六月三日寂
三世 永覚院 明和二年乙酉十二月四日寂
五世 明應院 永泉 寛政九年丁巳十月十日寂
六世 當住明應院 春長坊 宥世 文化四年己卯
五月入峯修行せり